

令和元年6月17日現在

機関番号：21301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02689

研究課題名(和文) 英語リメディアル教育におけるチャンツの有効性：リズム習得とWTCに焦点をあてて

研究課題名(英文) Effects of a chant method in English developmental education: focusing on English stress-timed rhythm and willingness to communicate

研究代表者

川井 一枝 (Kawai, Kazue)

宮城大学・基盤教育群・准教授

研究者番号：40639043

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：英語リメディアル教育の必要性が高まる中、該当学生96名を対象に、チャンツを用いた音読指導を行い、発音能力の変化とWTCや外国語学習不安などの情意面について調査することで英語リメディアル教育におけるチャンツの有効性について検証した。結果、発音能力に関しては事後に向上がみられ一定の効果を確認した。また、発音の評価において、音響分析ソフトと人の評価の比較を通して、発話速度・流暢さが母語話者の評価に影響していることも明らかになった。情意面においては、チャンツが該当学生の英語を発話する際の不安を軽減し、「英語を話そうとする意欲」に対して肯定的な影響を与える可能性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本課題から得られた示唆は英語だけではなくリメディアル教育全般に活用できると思われる。対象学生は英語学習に対する不安が高い一方、自信に乏しい傾向があり、授業では自己効力感を高めるような取組みが必要である。同時に基礎的な反復学習に意義をもたせ、安易なやり直し学習だけに終始しない工夫も求められる。チャンツは対象学生の英語に対する興味関心を再喚起し、発話の不安を軽減することで発音面の向上にも寄与するが、情意面や認知面に応じた提示方法が必要である。また英語母語話者が「自然な英語」と感じる要因には速度や流暢さが影響しており、プロソディ面に焦点をあてた効率的な発音指導の実践が望まれる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to investigate effects of a chant method in English developmental education. The surveys of pronunciation were conducted as follows; pre-test - reading practice with chants - post-test. The author also analyzed the learners' emotions using several types of questionnaires including WTC (Willingness to Communicate), FLCAS (Foreign Language Classroom Anxiety Scale), IP (International Posture), and a chant method. As a result, the significant differences between pre-test and post-test in the survey of pronunciation were confirmed. Also, the comparison of the evaluation by computer software program and by human (two native speakers' ears) showed that speech rate and fluency effected human evaluation. According to the result of questionnaires, it is likely that a chant method can reduce the learners' anxiety to speak out English words or texts and can make them have a positive effect for willingness to communicate in English.

研究分野：英語教育

キーワード：英語教育 チャンツ リメディアル教育 音読 WTC

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

英語の指導現場においてチャンツは、音楽やリズムに合わせて英単語や英文を繰り返し唱える練習法、またはその練習法で使用される教材の総称として認識されている。発端はキャロリングラムが開発したジャズチャンツである。日本では当初、私立小学校や民間の英会話教室など児童英語教育の現場を中心にジャズチャンツが受け入れられた。その後、日本の幼児や児童に合わせた独自のチャンツが数多く作られるようになり、チャンツは英語のリズムを指導する一指導法として広まった。現在では公立小学校の外国語活動や初級者を対象としたテレビやラジオの語学番組でもよく使われており、発音能力(リズムなどのプロソディ面)の向上リスニング能力の向上 単語や構文の習得促進 異文化理解や学習意欲の向上などに効果があるのではないかと認識されている。しかしチャンツは英語の音声指導において多用されているが、実証的な研究は少なく効果に関して未解明な点が多い。小学生を対象にした調査では、模擬対話能力の向上や異文化理解の促進に有効だったとする報告がある一方、発音能力を検証した調査では研究方法や評価方法も様々で結果も分かれている。

筆者は子どもを対象とした指導だけではなく、大学生以上の学習者を対象とした場合においても十分な学習効果が期待されると考え、これまで調査を行ってきた。不安などの情意フィルターを下げ学習意欲を高める点はもちろん、発話の流暢性を高める点についても、子どもより大人の方が注意深く聞いて模倣する力が一般的には高く、即時的な効果はむしろ出やすいと考えたからである。成人(14名)を対象とした調査では、週1回(45分)合計11週(回)チャンツを用いた音読(パラレルリーディング・テキスト付シャドーイング)練習を行い、英語母語話者が全体的な印象度(1-9段階)から英語リズムの習得度合いや自然さについて評価した。結果、インタビュー(自由会話)では確認できなかったが、テキストを音読する際の発音能力とリスニング能力には事前事後の間で有意な差を確認した。続いて、日本人大学生(96名)を習熟度3群、さらにパラレルリーディング(リズム無しの音読)群とチャンツ(リズム有りの音読)の2群の合計6群に分け、週1回(15分)合計5週(回)音読練習を行った。この調査では、人による評価を行わず、英語リズムの習得指標として、強勢拍と強勢拍の間、ISI(inter-stress-interval)・footの持続時間の増減を用いた。音響分析ソフトを用いて事前事後の音声データを分析した結果、全6群において事後の持続時間に減少がみられ、有意な差を確認した。特に、習熟度の低いチャンツ(リズム有りの音読)群においては、前後における持続時間の差が大きく、またリスニング能力においても有意な差を確認した。

2. 研究の目的

これまでの研究において、チャンツを用いた集中的な音読練習は大学生や成人の発音能力向上に一定の効果を見出し、特に習熟度の低い学習者に対する学習効果は大きいことが確認された。しかし、その効果はどのくらい持続するのか、また効果を見出すまでに必要な学習時間はどのくらいかなど疑問はまだ残る。また、日々の授業観察を通して、該当学生は概して消極的で自信に乏しい傾向であることを感じており、チャンツを用いた指導は彼らの積極性を高めWTC(willingness to communicate)を育むことを促進するのではないかと考えている。しかし、チャンツが習熟度の低い学習者の情意面に与える詳細な影響は明らかになってはいない。そこで本研究では、先行研究ならびに自身の研究経過を踏まえ、リメディアル教育を必要とする大学生を対象として、発音面に及ぼす効果、英語学習に対する意欲など情意面に与える影響、またそれらの関係性を検証し、英語リメディアル教育におけるチャンツの役割を探ることを目的とする。また、現代のグローバル社会においては様々な英語の発音が許容されており、学習者に発音のロールモデルを示しにくい現状がある。日本人が目標とする「分かりやすい・通じやすい発音」はどのようなものか、音響分析と人の評価の比較を通して、その構成要素についても解明を進める。

3. 研究の方法

(1) 発音面に及ぼす効果については、2015年から2016年にかけて該当学生を対象にチャンツを用いた音読練習を実施し、事前事後のデータを比較検証した。対象者は、英語専攻外の英語リメディアル教育を必要とする大学生96名(TOEICスコア250-300程度・英検4級程度)である。1回15分間程度の音読練習を8週(8回)取り組むグループA(36名)と15週(15回)取り組むグループB(60名)に分け実践した。参加者は毎回の授業開始時に、テキスト付属のCD(リズムビートと母語話者の音声)を聞きながら、テキストの英文を約15分間音読した。得られた音声データの発音評価は英語母語話者2名(アメリカ人・カナダ人)が行った。評価する際は、強勢拍リズムに焦点をあて「どのくらい自然に聞こえるか」を1-9段階で評価するよう依頼した。音読する課題文は、先行研究から弱音節の数が段階的に増えていく8英文を参照し用いた。

(2) 音響分析ソフトによる客観的評価と人による主観的評価の関連に関しては、2016年から2017年にかけて、これまでの研究で得られた音声データの1部を英語母語話者2名(アメリカ人・カナダ人)が評価した。事前事後テストの音声データ160文(20名×4文×2回)を各文、順不同にしたCDを聞き評価をした。評価する観点と尺度は上記と同じである。その後、音響分析ソフトによる結果と比較、検証した。

(3) 情意面の調査においては、2015年から2017年にかけて、先行研究から外国語教室不安

(Foreign Language Classroom Anxiety Scale)・国際的志向性 (International Posture)・L1 / L2WTC(willingness to communicate)の尺度を用いて、英語学習に対する意欲や不安、話そうとする意志などを調査した。またチャンツによる音読練習に対してどのように感じているかについても質問紙 (自由記述含む) で調査し、尺度との関連を検証した。

4. 研究成果

(1) 発音面に及ぼす効果 (8 回と 15 回の差): 欠席者や不備があったものを省き、分析可能となったのはグループ A (8 回) が 25 名、グループ B (15 回) が 24 名分のデータであった。課題文から 4 文を対象とし、事前と事後テストの音声データ 392 文 (49 名 × 4 文 × 2 回) の評価結果を分析した。評価者 2 名間の信頼性係数は高く評価の信頼性に問題はなかった。結果、グループ B (15 回) の前後には全文の評価スコアに伸びが見られたが、グループ A (8 回) では明らかな差を確認することはできなかった。グループ A (8 回) とグループ B (15 回) 間において、評価スコア (事前と事後) の変化パターンに違いがあるかを検証した結果、2 つのグループの変化には異なる傾向が確認された。図 2 が示す通り、15 回練習したグループ B においては弱音節が多く含まれる課題文 S3 と S4 の評価スコアが大きく伸びている。一方、図 1 が示す通り、8 回練習したグループ A では、事後において、特に課題文 S4 の評価スコアが大きく下がる結果となった。

日本人英語学習者の場合、母語のプロソディがそのまま英語に反映される傾向がある。一般的には弱音節が増えていくと英語のリズムが崩れがちになりスムーズに読めない傾向を考慮すると、即時的なものではあるが、この結果は 15 回練習の成果と言っていいただろう。しかし、これまでの筆者の調査では、人ではなく音響分析による持続時間の検証であったが、5 回練習の後に有意な前後の差を確認している。参加した学生の英語力は本研究の参加者と同等もしくは低いレベルである。音読のような反復練習を繰り返す活動では、学習意欲などの個人差要因も結果に大きな影響を及ぼすことが考えられる。発音能力の変化と練習回数に関しては、個人差要因も含め、更なる調査が必要である。

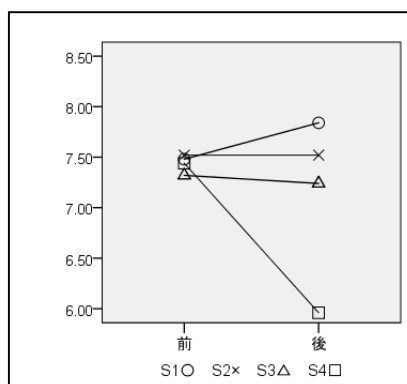


図 1 発音評価の結果グループ A

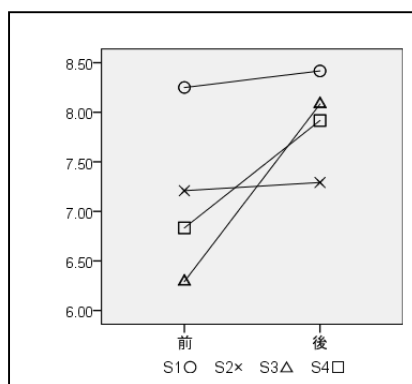


図 2 発音評価の結果グループ B

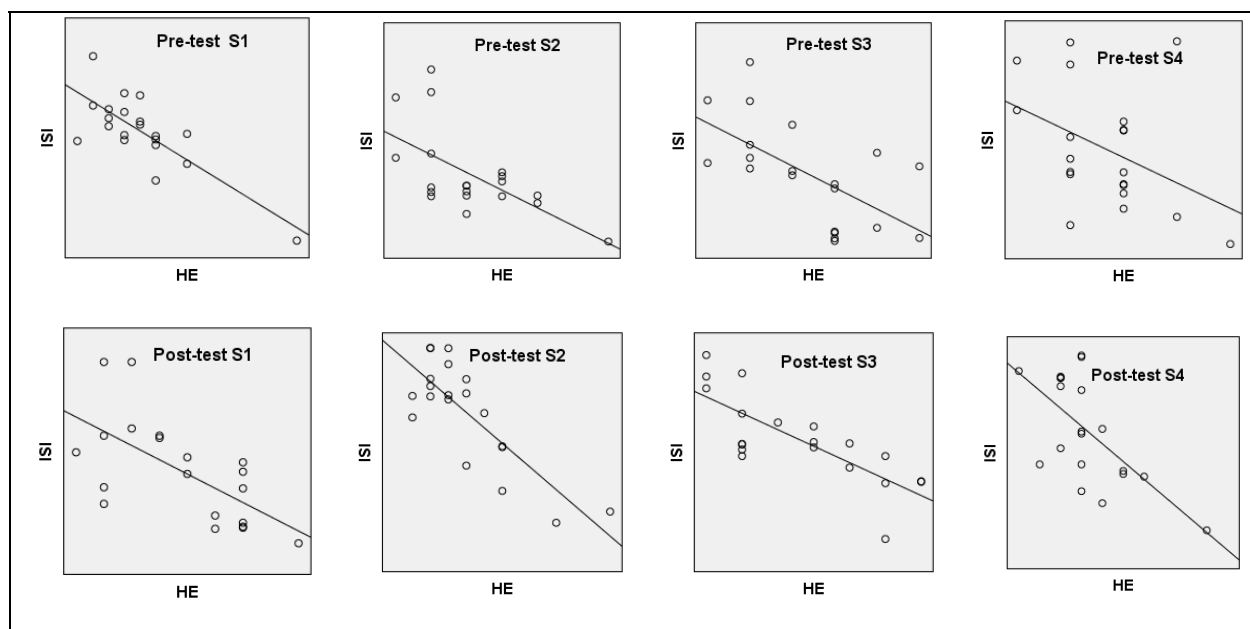


図 3 音響分析ソフトと人による評価の相関傾向

* ISI : 弱音節の持続時間、HE : 人による評価スコア

(2) 音響分析ソフトによる客観的評価と人による主観的評価の関連に関しては、音響分析ソフトを用いて計測した ISI ならびに全発話の持続時間と英語母語話者による評価スコアの相関を検証した。評価者 2 名間の信頼性係数は高く評価の信頼性に問題はなかった。音響分析ソフトにより計測された持続時間は全ての文の事前事後において有意な差がみられた。同様に人による評価も、全文において事前よりも事後の評価得点が高く有意な差があった。両者の相関比は高く、事前・事後ともに、持続時間が短くなっていくと母語話者の評価スコアが上がっていく負の相関傾向を確認した。図 3 の通りである。これは、持続時間が減少し (= 発話のスピードが上がる) 流暢性が増すことによって、英語母語話者はより自然な英語の発音だと認識する傾向があることを示している。

(3) 情意面の調査 : L1WTC、L2WTC、FLCAS、IP 尺度を用いた質問紙にはグループ A とグループ B の 93 名が回答した。各質問紙は 6 件法 (1 - 6) で回答してもらった。記述統計結果 (平均値/標準偏差) は、L1WTC (4.3/.95)、L2WTC (3.2/.96)、FLCAS (3.7/.80)、IP (3.0/.68) であった。それぞれの尺度の信頼性係数は高く本調査の信頼性は十分であった。さらに各尺度間の関係性を見るために検証したところ、L1WTC と IP に弱めの正の相関、L2WTC と IP 間、L2WTC と L1WTC 間に中程度の正の相関が、また L2WTC と FLCAS 間において中程度の負の相関が確認された。またチャンツに関する質問紙との関連においては、項目 6 (チャンツを用いた音読練習によって、英語を話してみたいと思う気持ちが高まりましたか) と L2WTC 間、L1WTC 間、IP 間に中程度～弱めの正の相関が、同様に項目 6 と FLCAS 間には弱い負の相関が確認された。

また習熟度が異なる集団との間に差があるかを確認するため、TOEIC 平均 450 - 500 程度の 68 名を対象に同様の質問紙調査を実施した。習熟度上位グループにおいても尺度の信頼性係数は高く本調査の信頼性は十分であった。68 名の記述統計結果 (平均値/標準偏差) は L1WTC (4.4/.87)、L2WTC (3.7/.93)、FLCAS (3.3/.22)、IP (3.4/.61) であった。同様に、各尺度間の関係性を検証したところ、L1WTC と IP 間、L2WTC と IP 間、L2WTC と L1WTC 間に中程度～やや強い正の相関が、また FLCAS と IP 間、FLCAS と L2WTC、FLCAS と L1WTC 間において中程度の負の相関が確認された。次に上記の調査結果とグループ A・B の結果間において習熟度の差があるかどうかを確認するために検証した結果、L1WTC を除く全ての項目に有意な差を確認した。

本課題の検証結果では、習熟度に関わらず日本語でも英語でも話そうとする積極性には関連性が見られた。そしてそれらは国際的な物事への興味や関心とも関連していた。反対に、外国語学習に対する不安が高い場合、英語を話そうとする積極性は低い傾向を示した。この傾向は、習熟度に関係なくどちらのグループも同じ相関傾向であった。しかし習熟度による差は顕著で、英語リメディアル対象の学習者の方が英語を話そうとする意欲や国際的な志向は低く、外国語学習に対する不安は高い結果になった。これは学習意欲と国際的志向性は強く結びついており、英語学習意欲が高いと有意に英語力が高いとする先行研究を支持するものとなった。

しかし相対的には英語を話そうとする意欲や国際的な志向が低いものの、本調査において英語リメディアル対象者の 54% が、チャンツを用いた音読練習を通して英語を話そうとする意欲が「とても高まった」「やや高まった」と回答している。また本回答と L2WTC 間には弱い正の相関を確認し、反対に FLCAS とは負の相関を確認した。授業観察などからも、チャンツを用いた音読を繰り返すことが「英語を声に出す・発話する」ことへの抵抗を軽減する一因になった可能性はあると考える。

まとめ：英語リメディアル教育におけるチャンツの役割

本課題においても確認された 発音、特にプロソディ面の習得、英語学習に対する興味や意欲などを促進する可能性についてはこれまでも英語教育におけるチャンツの効果として指摘されてきた。との即時的な効果に関しては、学習動機や目的が明確な場合は子どもより大学生以上の方が顕著に現れやすいと筆者は考えている。さらに英語リメディアル教育においてはこれらに加えて、情意面において肯定的に働く可能性が大きく、集中力を高める、達成感を持たせるなどの可能性について示すことが出来たと考える。

英語リメディアル教育の対象者は本調査でも確認されたように、習熟度の高い者と比較して外国語学習に対する不安が高く、自信にも乏しい場合が多い。実際、練習初期では、多くの学生がチャンツを「難しい」と感じ、自信の無さから発声を躊躇している。しかしチャンツのアップテンポのリズムや音楽が教室の雰囲気をも明るく楽しいものにし、全体練習も相まって、学生は次第に間違えることを気にしなくなる。さらに遅れないよう必死に夢中でついていこうとする姿勢からは、リズムや音楽が彼らの集中力を高めていると感じる。また、学生の自由記述には、最初は出来なかったものが練習を通して出来るようになった「達成感」に関する記述も多く確認した。小さなことであっても彼らにとっては「出来た」という達成感は大い。同様にチャンツに関する自由記述にはこれまでも「楽しい」という言葉が多く散見されている。無意識のうちに、いつの間にか夢中になって取り組んでしまう、繰り返しているうちにだんだん出来るようになる、そうした体験や過程を一言で表すと「楽しい」となると筆者は解釈している。

これまでのチャンツを用いた実践を通して、英語リメディアル教育におけるチャンツの最も大きな役割は、英語音声に付随するリズムや音楽が学習者の情意面に及ぼすこうした働きにあると考える。音声の習得は情意面と深く関わっており、特に習熟度が低い場合は学習者の自信

につながる可能性が高い。本課題で検証しきれなかった「効果と練習量の関係」や「学習効果の持続」に関しては適切なリサーチデザインを模索しつつ、今後も研究を続けていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2 件)

1 Kawai, K. (2019). Effects of reading aloud using a chant method: A comparison of acoustic analysis and human ears, *ARELE: Annual Review of English Language Education in Japan*. 30, 193-208. (査読有)

2 鈴木政浩, 居村俊子, 川井一枝, 小山政史, & 原口友子. (2016). 音声指導を重視した授業実践事例. *リメディアル教育研究*, 11(1), 23-29. (査読有)

〔学会発表〕(計 9 件)

1 川井一枝. (2018). チャンツを用いた音読指導の効果: 練習時間の差に焦点をあてて. 日本教育工学会第 34 回全国大会 (東北大学: 宮城県) 予稿集, 183-184.

2 川井一枝. (2018). リメディアル英語教育におけるチャンツの効果. 大学英語教育学会 (JACET) 第 57 回国際大会 (東北学院大学: 宮城県) プログラム, 85.

3 川井一枝. (2018). 外国語教室不安と国際的志向性: 英語リメディアル教育の視点から. 第 44 回全国英語教育学会全国大会 (龍谷大学: 京都府) 予稿集, 318-319.

4 川井一枝. (2017). 日本人 EFL 学習者を対象とした英語教育におけるチャンツの役割. 日本教育工学会第 33 回全国大会 (島根大学: 島根県) 予稿集, 863-864.

5 川井一枝. (2017). チャンツを用いた音読練習の効果: 発音能力と WTC の観点から. 第 13 回日本リメディアル教育学会全国大会 (大分文理大学: 大分県) 予稿集, 118-119.

6 川井一枝. (2017). 地方私立大学生の WTC と発音能力: リメディアル教育の視点から. 第 43 回全国英語教育学会全国大会 (島根大学: 島根県) 予稿集, 498-499.

7 川井一枝. (2017). チャンツを用いた音読指導の効果: 音響分析と人による評価の比較. 外国語メディア教育学会 (LET) 第 57 回全国研究大会 (名古屋学院大学: 愛知県) 予稿集, 176-177.

8 川井一枝. (2016). チャンツによる音読指導は大学生の WTC に影響を及ぼすか: リメディアル教育の視点から. 第 42 回全国英語教育学会 (独協大学: 埼玉県) 予稿集, 518-519.

9 浅野亭三, 壁谷一広, 川井一枝他. (2015). リメディアルを超えるリメディアル英語教育実践のあり方. 第 11 回日本リメディアル教育学会全国大会 (北星学園大学: 北海道) 予稿集 25-29.

〔図書〕(計 1 件)

1 川井一枝, 相澤一美, 柏木賀津子他(2018). 第 1 章なぜ英語教育において音声研究の視点が重要か? 13-36 (担当部分). 西原哲雄 (編著) 朝倉日英対照言語学シリーズ (発展編) 英語教育と言語研究 (総ページ数 170), 朝倉書店.

〔産業財産権〕

出願状況 (計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年:
国内外の別:

取得状況 (計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:

番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。